

氏名	四方田 健二
学位の種類	博士（体育科学）
学位記番号	博乙第 2945 号
学位授与年月	令和2年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	小学校教師の体育授業へのコミットメントを促す支援の検討

主査	筑波大学教授	教育学博士	菊 幸一
副査	筑波大学教授		清水 紀宏
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	澤江 幸則
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	樋口 直宏
副査	日本体育大学教授	博士（教育学）	岡出 美則

論文の内容の要旨

四方田健二氏の博士學位論文は、小学校教師において特に体育授業に対し苦手意識や消極的なかわり方が指摘される現状に鑑み、そのコミットメントに影響を与える要因と変容過程を明らかにすることで、体育授業へのコミットメントを促す支援のあり方について検討することを目的としたものである。その要旨は、以下のとおりである。

序章で著者は、上記に示した本研究の背景となる問題の提示および目的の設定を行っている。

次に第1章で著者は、教師の成長およびコミットメントに関する先行研究を整理し、その成果と課題を検討している。ここでは、教師の成長やコミットメントに影響を与える要因として、環境的要因と個人的要因が指摘されるとともに、教師間の協働的な支援が重要であるとの指摘がなされている。しかし、授業研究の形骸化や理論研究の不十分さとともに、この分野での研究方法論の未整理も指摘され、国際学術誌における研究方法の動向を整理する必要も述べられている。

第2章で著者は、理論的枠組みの整理と研究課題および研究枠組みの設定を行っている。理論的枠組みでは、コミットメントに加え学習の動機づけや成人学習理論などの教師の成長や発達に関連する概念を整理している。その上で著者は、次の3つの研究課題を設定している。すなわち、1) 小学校教師の体育授業に対するコミットメントを促す要因およびそれらの関係を明らかにする、2) 小学校教師の体育授業に対するコミットメントを阻害する要因およびそれらの関係を明らかにする、3) 体育科の校内授業研究を通じた小学校教師の体育授業に対するコミットメントの変容過程及びその過程に関連する

要因を明らかにする、というものである。これらの研究課題に対して、著者は目的的サンプリングにより対象となる教師および小学校を選定し、インタビュー及び参与観察により質的データを収集し、グラウンテッド・セオリー・アプローチ（GTA）によって探索的に分析することとした。

第3章で著者は、上記研究課題1)について、大学での体育科の長期研修に参加した小学校教師12名に対するインタビュー・データを質的に分析している。その結果、同僚教師の支援や職場での役割期待、研修への参加機会などの職場環境や学習機会に加えて、体育授業観や教師観などの体育授業に対する信念、児童の観察や指導の手応えの実感などの授業実践の省察といった多様な要因群の存在と、それらが相互に影響し合うことによって体育授業へのコミットメントが促されていることが示唆された。これらの結果から、環境的要因、個人的要因、省察に関わる要因が相互に関連する成長のプロセスが理論モデルとして示されている。

第4章で著者は、上記研究課題2)について、研究課題1と同対象者に対するインタビュー調査の質的分析により、体育授業へのコミットメントが阻害される要因を検討している。その結果、体育指導に関する研修機会の少なさや日常の職務の多忙感、同僚教師の体育授業観などの環境的要因に加え、教員養成課程での学びの不十分さや体育指導への苦手意識、体育授業観の不明確さといった個人的要因が影響していることを示唆している。このような研究課題1及び研究課題2の結果から、教師の体育授業に対する教育的価値の認識がコミットメントを促す一方で、同僚教師の体育授業観との差異による阻害要因が明らかになったことから、小学校教師の体育授業に対する教育的価値を重視する授業観の形成を促す支援の必要性とともに、学校の協働的、意図的な支援を通したコミットメントの変容過程を明らかにする必要があるとしている。

第5章で著者は、上記研究課題3)について、体育科の校内授業研究を継続する小学校に配置された初任教师3名を対象に4年間の参与観察とインタビュー調査を行っている。その結果、このような校内授業研究への取り組みを通して、体育授業観を共有する授業研究の体制と授業の協働的な省察が行われ、インフォーマルな協働やモデリング、教材、教具の共有などを通して負担感が軽減されていく過程が確認できたとしている。また、体育授業へのコミットメントの醸成を支える校内授業研究の特徴としては、授業研究に対する当事者意識の共有や多様な協働関係、継続した教科の研究がみられることが示唆されている。

第6章で著者は、これまでの研究課題1)～3)の結果を総括し、以下のような総合的な考察を行っている。すなわち、研究課題3)の対象校では、研究課題1)でみられたコミットメントを促す環境的要因が校内授業研究に組み込まれていると同時に、研究課題2)でみられた阻害要因を乗り越えレジリエンスを発揮する支援も機能していたと考察している。また、我が国における小学校の教師文化の特徴としては、同僚教師の役割期待や同調的風土による影響が大きいことから、体育科への指導内容や教育的価値が軽視されやすいコミットメントが生じる一方で、児童の好意的反応によるやりがいや価値の認識が得られやすいというコミットメントへの促進要因が指摘されている。さらに、成人学習理論や授業研究の先行研究では自己主導的な学習が教科へのコミットメントにとって重要視されていたのに対して、著者は、体育科においてはむしろ外発的、環境的な契機からコミットメントが促されることから、その過程において自己主導的な授業改善への取り組みにつながるような支援が重要であるとの示唆を行っている。

終章で著者は、本研究の結論として、1) 小学校教師の体育授業に対するコミットメントに影響する要因が相互に関係するプロセスを理論モデル化したこと、2) 校内授業研究が新任教師の体育指導の困

難を乗り越えるレジリエンスを促す機能があると示唆されること、3) 体育授業へのコミットメントは教師の自己主導的な学びによる促進が難しく、役割期待や環境的な契機の重要性がむしろ示唆されること、4) 全校的に特定教科の校内授業研究に取り組む意義が示唆されること、を挙げている。

審査の結果の要旨

(批評)

小学校教師はクラス担任制のもとに全科目を担当することになっているが、とりわけ体育科に対する苦手意識や当該授業への消極的なかかわり方への問題は以前から指摘されてきている。本研究は、そのような教科に対するかかわり方を「コミットメント」という概念を分析視点にすえたこと、またその促進及び阻害要因を質的研究法に基づく分析から示すことで、これらの要因を実際の校内授業研究実施校での小学校初任教师3名に対する4年間にわたるコミットメントの変化に適用して考察し、実際に有効な支援のあり方を当事者の立場から明らかにしたことが高く評価された。また、一般教科へのコミットメントでは、教師の自己主導的な学びが強調されがちであるが、体育科においてはまず当該教科に対する外からの役割期待や環境的な契機が重要であり、その上で教師相互の協働的な学びから主体的コミットメントが促される支援の特徴が示唆されたことが高く評価された。

令和元年12月3日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。